2.26　デブ

「デブ」という言葉は、明治時代以降に生まれた言葉と言われています。
その言葉の起源については諸説があるのですが、江戸時代からある言葉「でっぷり」から来ているというのが通説のようです。

でも、私には、明治になって我が国に入ってきた英語の「Double chin（二重あご)」が、日本人には「デブチン」と聞こえ、その省略形が起源だという説に大変引かれるものがあります。

根拠？
それは、江戸時代以前、我が国にはデブが殆どいなかったからです。これまで私が見てきた絵図に登場する男女は、多少小太りかなと思えるのがあるくらいで、例外なくスマートです。
その原因は明白で、体内に脂肪をため込めるほど、豊かな食生活を送れる人間が少なかったこととよく歩いていたことでしょう。ですから、せいぜい「でっぷり」という状況が関の山だったと思います。
私の想像では、当時の日本人は、明治になって本当のデブである外国人を見て、すごーい。ああいう肥満の人のことを「デブチン」と呼ぶんだと思ったに違いないのです。

まあ、昔のことはさておいて、飽食の時代と言われる今日この頃、なにやら最近身体の周りに脂肪がつきだしたことを気にしている中高年が増えていることは間違いないようです。
特に、最近では、「メタボ」という言葉が流行語のようになってきて、その正確な意味を理解しないまま、とにかく節食に走る人が増えていることも事実でしょう。

しかし、最近、我が国のメタボに関する基準については、多くの医者によって疑問が出されているようで、特に、私たちが大変気にしているお腹周りの基準を必須要件としていることについては、医学的な根拠に欠けるという指摘をしばしば目にします。

文科系の私の貴重な友人である医学部の新進気鋭の先生などは、「あんなもの、厚生労働省と製薬業界の悪巧みですよ」なんちゃって鼻で笑っているのを見ると、「えー、じゃあ、何を信じればいいの？」と思っちゃうのです。

どうも、肥満かそうでないかについては、いろんな説があるようで、必ずしも確立したものがあるわけではないみたい。

結局、いろんな基準を総合的に勘案して（役人の答弁みたい！）判断するようだというのが、文科系の私なりに理解した結論。

その中で、一番よく使われているのが、ボディ･マス指数（ＢＭＩ）というもので、
（体重）kg÷（身長）㎡の数値を使うもの。
ちなみに、私の場合、体重が 75 kg、身長が 1.77 ㍍だから、75÷1.77×1.77＝23.94
この数値が 25 以上あると、日本では肥満。18.5 未満だと痩せ。
その間の 18.5 以上 25 未満だと標準らしい。

どうです？
計算してみました？
でも、これがアメリカでは、30 以上が肥満。5 も違う。私の身長で言うと、肥満に当たるためには体重が 94 kgちょっとなきゃいけない。
アメリカでデブになるには､あと 20 kgもある｡これはデブになるのもなかなか大変みたい。

でもね、メタボ検診では、まず、お腹周りを測ることから始まるのですね。男性の場合、85 ㎝あると指導がされるグループになっちゃうのですよ。（ちなみに女性の場合お腹周りは 90 ㎝以上らしい。なんで？　差別だ！　わけわかんない。）

恥ずかしながら、私の場合、お腹周りは 92 ㎝で、デブでないのに要指導グループ。
ハイ、ハイ、こっちにいらっしゃいって、血圧、血糖値、中性脂肪、コレステロールを調べられちゃうのですね。
結果、血圧はずっと前から高血圧なのでアウト、コレステロールもアウト。
かくして私は、栄えある「メタボリック・シンドローム」の資格を獲得しました。
ハイ、もっと痩せましょうね。

でもね、これって、なんとなく文系人間を納得させるには、疑問だらけ、説得力ないなあという印象。
だって、さっきのＢＭＩの説明を読むと、確かに肥満の人の死亡率は、標準の人の倍近いけれど、同じように、痩せの人の死亡率も、標準の人の倍近くあって、痩せりゃあいいってものじゃないみたい。
ある雑誌では、ＢＭＩが 24～28 が最も死亡率が低いと言うのもあったりして。

くだんの医学部の先生、医者としての腕は疑問に思うけど、
「先生､昼飯に蕎麦なんか食べてると､すぐに呆けちゃいますよ｡毎日とは言わないけど、肉をもっと食べて、卵も毎日 2 個以上食べて、楽しくやらなきゃ」なんて言ってる。
どうして、保健指導の看護婦オバさんということが正反対なのかなぁ？

もうこの歳になると、どっちでもいいかと思うし、お腹周りを減らす気もないけど、女性はやはり、痩せているより、ぽっちゃりがいいなあ。
昔から、美人はぽっちゃりが必須要件。

とりあえず、痩せた中高年のオバさんほど、世の中に恐ろしいものはいないと私は思っているのですけど。

6.7　すっぴんと素足

昔から、大変美しい女性のことを「別嬪（べっぴん）」さんと言っていますが、これは「別」に「とりわけ」という意味があることから、とりわけの「嬪」、つまり特に美しい女人、姫をさして使われてきました。

ところで、最近、テレビなどを見ていますと、「すっぴん」という言葉がよく使われています。
この言葉については、ついぞ正確な意味を聞いたことがありませんので、いささか自信がないのですが、おそらくは「化粧をせず素顔のままの状態」を指しているのではないかと思います。念のため、広辞苑をみても、ほぼ、そのような意味のことが書かれていました。

しかし、この「すっぴん」という言葉は、漢字で書くと「素嬪」。
本来の意味は、化粧をしないでも素顔が美しい女人のこと、つまり素顔美人の「**嬪**」。

素顔が美しくない人は、すっぴんとは言わなかったのですが、
どこかで、誰かが間違えて、意味が変わってしまったのですね。

さて、この「素」という字なのですが、
この字は、本来、人の手を加えず、そのままという意味です。さらに、そこから派生して、まだ何にも染まっていない「白い」という意味や、余計なお金をかけないという意味まで含まれていることがあります。

この意味の「素」には、なかなか厳しいところがあって、常に、そのものの本質が問われることにつながります。
例えば、「素」うどん。
これは、何も入っていない「かけうどん」のことですね。
この素うどんの場合には、うどんそのもの美味しさや出汁そのものの美味しさが問われるのですね。

人間の場合でも、この「素」で判断されると、なかなか辛く、厳しいところがあります。

ところで、「素」という字には、素晴らしいという意味が込められる場合があるのです。
例えば、「素敵」。
素敵という言葉は、昭和に入ってから使われるようになったもので、「敵」は当て字なのですが、とても敵わないほど素晴らしいという意味で使われています。

この素敵のもとになったのは、江戸時代の俗語でひらかなの「すてき」。
「すてき」には、明治に入って、「素的(適)」という漢字が当てられるのですが、
これは、素晴らしい（素）＋様子を表す（的）接尾語でした。
「素嬪」の「素」も、元は、この系統かも知れませんね。

さて、最後に、私の好きな言葉、「素足（すあし）」。

いえ、「裸足」ではありません。

え、素足と裸足は、どう違うの？

「裸足（はだし）」は、本来であれば、履き物を履く必要があるにもかかわらず、履き物を履かないことをいいます。
何かの事情があって、足袋をはいたまま、外を歩くことは、裸足。例えば、「足袋裸足」という言葉を使うこともあります。

これに対して、「素足」は、履き物を履く必要のないところで、足袋や靴下をはかないことをいいます。
畳の部屋で、足袋をはかず、踵をつけず、すっと流れるように歩くのは、素足であって、裸足ではないのです。

これに準じて考えれば、「すっぴん」は、本来、化粧をする必要のないところで、素顔のままでいること、でしょうか。

それにしても、電車の車内で化粧をしている「女性？」を見かけることが多くなりましたが、そのたびに、「裸顔（らがん）」という気恥ずかしく、些か卑しい意味を持つ言葉を思い浮かべてしまう私です。

6.17　うおとさかな

先日、銀座で、岩牡蠣をいただく機会がありました。
冬にいただく養殖真牡蠣と違って、大きくて、値段も高い（らしい…払っていないからわからない！）。

牡蠣は、普通、月の名前に「R」が付かない月、つまり May, June, July, August（5 月～8 月）には食べない方が良いとされているのですが、これは真牡蠣のことで、岩牡蠣は別ですね。
でも、牡蠣は体調の余り良くないときに食べると、変調をきたすことが多いので、死ぬほど我慢して、この日は生 1 個のみ。
ワインも、辛口の白をグラス一杯だけ。
あーあ、ザンネーン。ですねぇ。

ところで、「牡蠣」の漢字は、「牡」という字と「蠣」という字からできてますが、「蠣」という字だけで「かき」と読みますから、「牡」という字は「無音」なんですね。
知ってました？

牡を「か」、蠣を「き」と思っている方が結構多いんですね。

では、どうして「牡」という字が付いているのか？
これは、余り知られていないのですが、昔の人が牡蠣には牡しかいないと信じていたところからきているのですね。
なぜそう信じたかということについては、説明が長くなるので本日は省略。
貝に牡と牝があって、どこがどう違うのかなんて、生物の授業では習わないし、知っててもなんの役にもたちませんしね。

無音の「牡」は別として、「蠣」も貝なのに「虫」偏。
これ、以前の話（四季…早春「ハマグリの厄日」参照。）で、昔の中国では、人、獣、鳥、魚以外は、一括して虫という字で総称していたと申し上げましたから、もうおわかりですよね。

以前にも言いましたけれど、私、貝類は好物なんですが、食べるときにどうしてもこれを思い出してしまうんですね、そして、一瞬なんだけど、気持ち悪いと思うんですよ。
これも、知らない方が幸せな無駄な知識ですね。

さて、では、貝なのに、どうして貝偏にしなかったのかと思いません？

これね、貝が付いている漢字をとりあえず、並べてみるとわかるのですが、これらの中に、生きている貝を表す字は一つもないんですね。
ちょっと見てください。

貨、財、賣、買、購、貸、賃、貴、賞、賜、貢、賄、賂、贈、贋、貧、貪、等々

「貝」は、もともと巻き貝の貝殻を指している字なんですが、古代中国で宝貝の貝殻が貨幣の代わりに用いられていたことから、これらの字はそこからきているのですね。で、これらはことごとく死んだ貝の貝殻。

うーん。資本主義社会は、死んだ貝に牛耳られている？

漢字の世界では、民主主義社会は、「目の見えない奴隷たち」の社会（皮肉？）だから、死んだ貝でも仕方ないか。
まあ、こういうことは、どれもちゃんと説明しなければ、コイツ、何言いってんだとなるから、日を改めて別の機会にしますね。（ちなみに「民」という漢字は、目を潰された奴隷から来ています。）

さて、貝類は、生きている場合と死んでいるものとで、字の構造が違うのだけれど、生きているものと死んでいるものとで、漢字は同じだけれど、読み方が違うのが「魚」。

えーっ、ホント？

ええ、ホント。昔はね。
魚は「さかな」と読む場合と「うお」と呼ぶ場合がありますよね。

これ、「うお」と読むのは、生きている魚の場合。
「さかな」と読むのは、死んでいたり、加工されたりしている場合。

魚屋さんは、死んでいる魚或いは捌かれた魚を売っているのが原則だから、うお屋さんじゃなくて、さかな屋さん。
まあ、たまに生きているものを売っている場合がないとは言えないけれど、これはあくまで例外。

もともと、さかなは、「肴」という字で、お酒をおいしく飲むに当たっての「酒菜」つまり「おかず」。
だから、食べ物には限らない（例えば上司の悪口などの楽しいお話など）のだけれど、酒の肴のなかで、一番おいしくて、豪華な魚料理に「さかな」という読みが当てられるようになったんですね。

え、上司の悪口の方がおいしいって？

生きてる魚（うお）は、鱗があったり、トゲや骨があったり、そのままだとはね回って、食べるのが面倒だから、どうしても死んでもらって、食べやすいように加工しますよね。こうなると、魚は（さかな）になるんですねぇ。（生身の上司？もそのままでは食べにくいので、加工するでしょ、普通。）

ですからね、太公望の皆様、サラリーマンの皆様、釣っても「さかな」さんにするつもりのない「うお」さんは、逃がしてあげましょうね。
つまり、新人の部下は間違っても「さかな」にしてはいけないということですね。

え？

なんまんだぶ、なんまんだぶ。

6.26　耳嚢（みみぶくろ）

「耳嚢」と言っても、
「何それ？　耳の病気？」というのが普通の方の反応。
「ああ、聞いたことある」という人は、かなり江戸時代に興味のある方。
「読んだことがあるよ」という人は、今までのところ、私の周りには誰もいません。

これ、江戸時代の中期に佐渡奉行や勘定奉行をしたことがある根岸鎮衛という人が、30 年間にわたって、自分が見聞きしたことのあることを書き留めたもので、全 10 巻、おおよそ 1000 編からなるいわば雑記帳なんです。

この人、三河以来の幕臣ではなくて、途中から幕府に仕えた経済官僚の一人。
（この頃になると代々の世襲幕臣には経済を動かすことができる人材がいなくなるのですね。今の自×党みたいですね、世襲は昔から無能者を生むことが多いのです。ホント）

耳嚢は、彼が、多忙な仕事の合間を縫って少しずつ書き溜めたものですが、今の私たちから見ると、荒唐無稽のものとか、あり得ないだろうと思うことも沢山載っています。
それでも、当時の知識層がどんな考え方をしていたか、興味の対象がなんだったのか、などがよくわかりますし、話の中で出てくる庶民が想像以上に現実的な行動をしているのに驚きます。決してアホではないし、結構ずる賢いこともします。

耳嚢、なにしろ膨大な量だし、今の言葉で書かれているわけじゃあないので、紹介するのも難しいのだけれど、どんなものか知ってもらうために、一つだけ、あげてみます。
次のものは、おそらく著者根岸鎮衛クンが佐渡奉行だった頃のもの。そのまま転記すると意味がわかりにくいので、勝手に現代文に直して掲げます。

巻之三　「天作其理を極めし事」
［拙訳］
「佐渡の国には、牛、馬、猫、犬、鼠のたぐいを除いて、いわゆる獣にあたるものがおりません。田畑を荒らす猪や鹿もおらず、人を化かす狐も人を害する狼もおりませんので、庶民はこうしたものに思い煩らされずに済んでいます。
しかし、当地では金銀が多く採れますので、これらを溶かす吹革(ふいご)が非常に沢山必要になるのですが、この鞴(ふいご)には狸の皮がどうしても必要になります。
なんとも不思議なことなのですが、佐渡の国には獣がいないにもかかわらず狸だけはいるのですね。これは、なんというか、天が佐渡の国のためにそうしたとしか思えないじゃあありませんか。」

どうですか？
結構おもしろいでしょ。
私は、これを読んだとき、まず、ホントかなと思いましたね。
佐渡には狸がいるのに、狐がいない？

そう思ったんですけどね、これ、確かめようとするとなかなか難しい。

でもね、思い出したんですよ。狂言の中に「佐渡狐」というのがあったのを。
古典芸能を勉強していると、たまに、良いこともあるんですね、滅多にないけど。

狂言「佐渡狐」のスジを、チョー短く言いますと

「佐渡と越後の百姓が、年貢を納めに都に行く途中で道連れになるのですが、佐渡に狐がいるかどうかを巡って言い争いになり、持っている刀を賭けることとし、都の年貢の奏者（取次役人）に判定を任せることにします。
都に着いた二人のうち佐渡の百姓は、年貢を納めた際に、奏者に賄賂を贈って、佐渡にも狐がいることにしてもらい、自分が見たことのない狐の姿を教えてもらいます。
奏者は、佐渡にも狐がいるといい、納得のいかない越後の百姓は、佐渡の百姓に狐のことを質問しますが、前もって教えてもらっていた佐渡の百姓はなんとかそれを乗り切って、刀を手に入れます。
しかし、どう考えてもおかしいと思った越後の百姓は、佐渡の百姓を呼び止め、最後に狐の鳴き声を尋ねます。鳴き声を教えてもらっていなかった佐渡の百姓は、なんとか逃れようとするのですが、遂に追い込まれて、東天紅（トウテンコー）と鶏の鳴き声をしてしまい、ばれて刀をとられるというお話です。」

このほかにも、佐渡の相川には「団三郎狸」という伝説があるそうです。この団三郎狸が佐渡に渡ろうとする狐との化かし合いに勝ち、そのために狐は佐渡に渡ろうとしなくなったというもので、このお話もすごくおもしろいのですが、長くなりますので、別の機会に話すこともあるでしょう。
この団三郎狸さん、「平成狸合戦ぽんぽこ」にも、佐渡の長老狸として、ちょっとだけ名前が出てきますよね。

ところで、耳嚢と比べるのもおこがましいのですが、私も、若い頃から、自分が気になったことや疑問に思ったことを書き留めていて、現役を引いた後、少しずつ暇を見つけて、整理してきており、その中から、おもしろくて、分かりやすいものを少しずつまとめてきました。
山のようにあった資料も、やっと半分くらいになって、先が見えてきたのですが、残ったものは、まとめるのが難しいものが多くて、易しく、わかりやすく書こうとすると大変です。もう少し文才があればなぁ。

7.7　烏鵲橋

えーと、四季…盛夏「天の川の渡河方法」のところで出てきました「カササギの渡せる橋」のカササギですが、この鳥、ご承知かと思いますが、我が国ではほぼ佐賀県に集中して生息しており、天然記念物に指定されています。
ですから、九州以外にお住まいの方は、名前を聞いたことがあるけど、見たことがないというのが普通だと思います。ちなみに、下の写真のような鳥です。

この鳥、ヨーロッパからロシア、中央アジア、中国、朝鮮半島、北アメリカとほぼ北半球全域に生息していると言っていいのですが、なぜか、我が国では佐賀にしかいない、不思議な鳥で、天然記念物の指定も、数が少ないからという理由より、生息地が限定されているからという理由によるものです。

どうして佐賀にだけ？
理由はよくわからないようです。
一説によれば、秀吉クンの暴挙、朝鮮戦役の際に「カチドリ」という名前に惹かれて連れ帰ったと言われますが、それでも、その後全国各地に広がらなかった理由はわからないそうです。
世界的な生息分布からは、かつて日本にも各地に生息していたのが、何らかの理由で生息地が縮小したと考える説もあるようです。

昨日の大伴家持の歌、「鵲の　渡せる橋に　置く霜の」のカササギについても、大陸の七夕伝説とともに、我が国に入ってはきたものの、当時実物はいなかったとする架空鳥説が通説のようです。
ただ、身体の上半分は黒、下半分は白という姿であることは知っていたようですが。

ところで、百人一首で有名なこの歌、なぜか載っているのが、「新古今集の巻六」の冬の歌。
大伴家持と言えば、有名な万葉歌人。どうして、万葉集にこの歌がなくて、新古今？

実は、私、この歌、ホントに家持？　って疑っているのですが、幾ら素人の悪ふざけとしても、さすがにそんなことを言う勇気はありません。

この歌の「鵲の渡せる橋」は、言わずと知れた天の川に架けられる鵲が翼を広げて作る橋のことで、正確には、「烏鵲橋（うじゃくきょう）」。

天上界に架けられる橋ということから、内裏を天上に見立てて、宮中の紫宸殿の南の階段（きざはし）のことを、鵲の渡せる橋と言ったんですね。

ところで、橋は、通常、直接には行けないＡ地点とＢ地点をつなぐ機能を果たすもののことを指す言葉です。
天の川や宇治川のように、間に川があることは必要条件ではありません。

ですから、宮中紫宸殿に昇殿するに当たって、昇殿する地位・資格を持った貴族のみが、通ることのできる階段も「はし」と呼ばれたのですね。

ところで、橋と同じように、直接行けない二地点を結ぶ意味を持つ言葉は他にもあるのです。
例えば、梯子（はしご）、柱（はしら）などです。

どちらも、「はし」、つなげるという意味を持って名付けられています。

実際のものだけでなく、
厚く垂れ込めた雲の間から射す一条の光、「天の梯子」。
出雲、伊勢、諏訪の神社に見られる「御柱」。天上の世界を支える「天の柱」。

天だけでなく、人の場合も、例えば、「夢への架け橋」。今でもよく言われますね。
若い頃にみんなの心の中に必ずある「夢」。
この夢に橋を架けるのが、若い人の特権。

私の場合、架け損ねて、変な橋になってしまったけれど、このごろ、橋を架ける気持ちすら無くなってしまった方を見ていると、なんだか悲しいですね。

「はし」という言葉、大切に使いたいものです。

7.8　橋と箸

先日、「橋（はし）」の話をしましたが、橋とおなじ発音をする「箸（はし）」のことに全く触れないで終わってしまいましたので、今日は箸の日には早いのですが、箸のお話。

橋は、直接行くことができない二地点を結ぶという機能を持つものに対して使う言葉と説明し、橋だけでなく、梯子（はしご）や柱（はしら）という言葉に「はし」という字句が用いられているのも同じ意味だと申し上げました。

また、この「はし」は、物理的な意味だけに留まらず、地位や夢などの抽象的な隔絶を超えて結ぶ意味もあると申し上げました。
宮中紫宸殿に昇殿できる地位と資格を持つものだけが通ることのできる南階段(きざはし)に鵲の渡せる「はし」という言葉が使われているのも、この意味の「はし」だと考えられるからです。

もちろん、この考えは、現在、確立している通説とは言えず、異説に近いのかも知れませんが、それでも私は、この考えが正しいと確信しています。

ところで、毎日私たちが使っている箸も「はし」と呼ばれているのですが、これはどうなのか？
そう思った方がいたとすれば、それは単に、私が書き忘れていただけのこと。
箸もまた、橋と同じ機能と意味をもったものと、思えるところがあるようです。

古代、箸は、神具として用いられていたことはよく知られており、その当時の箸の形は、竹を薄く削って、折り曲げたピンセット型（私に言わせれば、ゴミ拾いの時に使うトゥングのような形）をしていたことは、別に「二本の箸がどんぶらこ(暮らし参照)」のところで書いておきました。

この神具としての箸は、天から授かった恵みを、天皇が国の民を代表して、感謝しつついただく儀式（新嘗祭）において、天と人間の間をつなぐ神聖で重要な道具として用いられたと考えられているようです。

箸は、天界のものと人間界のものを結び、渡す機能を持つ神聖なもの。
ですから、古代、箸が、神事に携わるごく限られた人間にしか、使用が許されなかったのは、ごく当然なことだったと思われませんでしょうか？

その後８世紀に入って、次第に、箸は、貴族社会でも用いられるようになり、日常的に用いられることで、神聖さを失っていくのですが、今でも、幾つか、神具としての名残を残しているように思えるところがありますね。

その一つが、「ハレ」の日に用いる箸と「ケ」（日常）の日に用いる箸を区別していること

です。

ハレの日に用いる箸は、両先端が細く削られています。
これは一方の端が人間のためのもの、反対側のもう一方の端は神が使われるものと言われてきており、ハレの日に、神とともに、一緒に同じものを食べることにより、感謝と喜びの気持ちを表したいとするものと言われています。

もう一つ、私たちは、食事をするに際して、「いただきます」という言葉を使いますが、これは、本来、神への感謝の言葉と考えられること。
また、食事の最後に、箸を捧げ、頭を下げて言う「ご馳走様でした」は、神へのお礼の言葉と考えられることです。

いつの間にか、私たちの心の中から、自然に対する感謝の気持ちが薄れてきたせいでしょうか、どちらの言葉も、違う意味で使われていることを、私は、大変残念に思います。

7.12　無釣果をぼうずというのは

ある方に、どうして釣果の全くないことを「ぼうず」というのか、と聞かれたのです。

私、釣りは未経験者に近い素人ですが、それでも、誘われて参加すると、魚さんの方から釣れてくれて、ぼうずの経験はありません。
ですから、あまり興味がなかったのですが、「ぼうず」という言葉はちょっと気になって、調べてみました。

結論から言いますと、あまりはっきりとした語源は分かりませんでした。
諸説によると、ぼうずという言葉が使われている裏には、主に次のような理由があるとされていました。

Ａ説　今日は釣れずに殺生をしないで済んだという意味で、ぼうず。
Ｂ－１説　今日は魚が釣れる気配すらなかったという意味で、毛がないから、ぼうず。
Ｂ－２説　魚が釣れなくて、儲けがない（もう毛がない）という漁師の言葉から、ぼうず
Ｂ－３説　今日の釣りは「不毛」だったという意味で、ぼうず
Ｃ説　百人一首の「坊主めくり」で坊主を引いた人が持ち札を全部吐きだしてスッカラカンになることから、ぼうず
Ｄ説　釣った魚を入れるバケツに水だけが入っている様子が満月に見えるので、花札の「松桐坊主」の月からぼうず。

このほかにも、Ｄ説の系統を除き、似たり寄ったりで、僧侶が絡み、毛がないことにかけています。

まあ、私も、余りこれらの説に異論を唱える気にはならないのですが、
なんとなく、しっくりこなかったのですね。
そこで、私が考えてみたのが、次の説。

また、妄想？
ええ、まあ。

この暑いのに、聞きたくないよねぇ～、
まあ、まあそういわず。

さて、その妄想なんですが、
古代中国では、女性は魚にたとえられていたことがあるのです。

その名残は、今のわが国でも残されていますね。
少々下品だけれど、よく、女性の心を捉えたことを男性の側から「釣り上げた」と言いますでしょう。
最近は、鮎じゃないけど「引っかけた」とか言うのも同じですね。

なかには「釣った魚に餌はやらない」なんて、無理している男もいるようだけど。

あ、女性の方々、ケシカラン、って怒らないでください。
私は、単に、世の男達がそういう言葉を使っている事実を言っているだけですからね。

でもね、これ、実は、女性の側からも使っているじゃあありませんか。
自分に興味を示してくれない男性のことや、自分の気持ちに応えてくれない男性のことを、「つれない人」なんて言いませんか。
これ、自分を釣ってくれない人をなじる言葉なんじゃあないのですか。
違う？
あ、そうなの。

ところで、昔のまっとうな僧侶は、女性を釣ることはしなかったですから、
つまり、女性＝魚　を釣らない人＝僧侶（ぼうず）なんですね。

私、これが、無釣果を「ぼうず」と言っている元ではないかと思っているのです。

え、昔から、ぼうずは、裏で、魚を食っているし、女性も釣っているって？
そうそう、ですからね、この言葉には、釣り人の悔しい気持ちが込められているのですよ。

つまり、あの「ぼうず」でさえ、つらぬと言いながら釣っているのに、なんで、俺様が釣れないのかって。
「ぼうず」は、ボウズらしくしておれ、このくそぼうず。
という憤懣やりきれない思いを込めて、今日は「ぼうず」

魚が釣れないのを「ぼうず」というのは、釣り人の強烈な皮肉なんですね。

以上が、私の、ぼうず＝無釣果説。

当然ながら、今まで、一人として、支持者はいません。
ア、ハ、ハ.

これくらい、アホなことを考えていると、暑さも気にならないと思いませんか。

8.26　三度笠

私がまだ小学生だった頃、家にテレビがある家は数えるほどで、映画が全盛でした。
なぜか､今と違って股旅もの(といっても今の若い人にはわからないかも知れませんねぇ)なんかが流行っていて、やむを得ず非道な敵役を倒した若い博徒のお兄いさん、お尋ね者になって故郷にいられなくなり、ほとぼりが冷めるまでさすらいの旅に出、諸国を巡るってストーリーが多かったような気がします。

ちょっと時代が下がってくると、映画には我が愛する高倉健さんが颯爽と登場しますが、やむにやまれず、懐にドスをのんで、立ち上がる姿は、格好よかったですねぇ。
その健さんも今や 80 歳。
昭和は遠くなりつつあります。

ところで、ドスは、別名「あいくち」、脅すの「お」を省略したものであることはご存じの通りです。

この長いものは長ドスと呼ばれ、先ほどのお尋ね者になった博徒のお兄いさんが、旅から旅へとさすらう時の姿は、長ドスの一本差しでした。

私の時代の代表選手は、「木枯らし紋次郎」クン。
彼の差していた長ドスの長さは、笹沢左保さんの原作小説を読むと、2 尺、つまり約 60 ㎝ですね。
これは、当時の法度に違反していた（寛文法度では庶民が道中差として認められていた脇差しの長さは 1 尺 8 寸、54 ㎝まで）のですが、元々無頼者ですから守らないのは当たり前かも知れません。

なお、武士が腰に差す大刀の長さは、原則 2 尺 8 寸以下とされていましたから、84 ㎝。

刀でも、3 人くらいしか斬れないとすれば、この長さの差では、場合によっては、ヤクザの長ドスでも、侍と良い勝負？

とまあ、私、10 年ほど前まで思っていたのですが、あるとき、ある資料を読んで認識を改めました。
その資料には、備前長船祐定などで人を斬ったときの記録が記載されており、刃こぼれ一つなかったとありました。名のある刀鍛冶の作った名刀で、きちんと剣術を治めた人間が扱うと、日本刀は一人や二人では刃こぼれすらしないのですね。

一方､長ドスですが､違法な長さの脇差しをまともな刀鍛冶が作るわけがありませんから、これでは、本物の刀で人を斬るようにはいかなかったようです。

ですから、木枯らし紋次郎クンの監督、市川崑さんは、中村敦夫さんに、斬るのではなく、突かせていますし、武士との斬り合いなどは決してさせていませんね。
まともな刀とやり合えば、打ち合っただけでポッキリ折れてしまったり、曲がってしまうからですね。

武士が名刀にこだわるというのも分かりますねぇ。

ところで、股旅ものと言えば、長ドスの他に、縞の合羽と三度笠が必需品。

♪　合羽からげて　三度笠ｱ～

合羽は、ポルトガル語の「Capa」、着ますと鳥が翼を合わせた格好になるところから、合羽の字を宛てたのですね。
材料は、木綿か和紙。畳んで小さくなり、雨風を防ぎ、旅人の必需品でしたから、股旅ものに限ったものではありません。

これに対して、三度笠は、股旅専用。

どうして？
もともと三度笠は、江戸と京都と大阪の間を月に三度往復していた定飛脚（三度飛脚と言われました）がかぶっていたものなんですね。三度飛脚がかぶっていたから三度笠。飛脚は防犯のために、長脇差しを差していました。

凶状持ちでお尋ね者の股旅さんが、飛脚に化けるために三度笠をかぶったようですが、顔を深く覆えることから、人相を隠す必要のあった股旅さんには都合良かったのですね。
ですから、最近の映画の三度笠のかぶり方は、問題があります。
主人公の顔が見えないと映像的に困るという理由でちょんまげの上にチョイ乗せするのは、どうかと思いますねぇ。

最後に、江戸時代の川柳などを見ていますと、ときどき「十七屋」というのが出てきますが、これは飛脚のこと。
「十七屋」は、「十七夜」の語呂合わせ。

十七夜の月は、立ち待ち月。
長く待つことなく、忽ちに観ることができる、つまり忽ちに着くからですね。

　はやり風　十七屋から　ひきはじめ

9.22　岡目八目

先週の 13 日のことですが、将棋の羽生善治さんが、挑戦していた王位戦で、広瀬章人さんを 4 勝 3 敗で破って王位を奪取しました。
私、将棋も囲碁もやらないのですが、子どもの頃、父に習ったお陰で、一応は両方ともに打てるので、暇なときには新聞に載っている棋譜などを見て楽しんでいます。

ところで、今は殆ど使われなくなった言葉に「岡目八目(おかめはちもく)」というのがあるのですが、ご存じでしょうか？

これは、他人の将棋や囲碁を傍で見ていると、どうしてこんないい手があるのに打たないのかと思うことがあるように、他人のことを横から見ていると、状況が客観的によく分かるという意味ですね。

八目というのは、打つ手が八目先まで読めるという意味とされていますが、これには異説があって、八目置かせても勝てるほど良い手が打てるという意味だとするものもあります。

ところで、八目はいいとして、「岡目」って何？

誰です？
「オカメ、ひょっとこ」って言ってるのは。

余り知られていないのですが、「岡」という字には、次のような三つの違う意味があるのですね。
1　小高いところ。　峰(お)＋処(か)
2　何かの傍ら。　小(お)＋処(か)
3　陸のこと

「岡目」の「岡」は、2 番目の「傍ら」に当たります。
「傍で見ていると」という意味ですね。

でもね、この 2 番目の「岡」の中には、傍らは傍らでも、少し問題のある「傍ら」があるんですよ。

例えば、「岡場所」。
江戸幕府が、吉原以外の場所で、私娼を公認していなかったことはよく知られていますが、深川や品川などでは、闇で、実際に売春行為をさせる店が存在していました。
このような場所を岡場所と呼んでいたのは、ご存じかと思いますが、この「岡場所」の「岡」には、「主」に対する「傍」という意味だけでなくて、「公認されていない」「真っ当でない」という意味が付加されていることがわかります。

もう一つ例を挙げれば、「岡っ引き」。
これは、同心の手先となって、探索や捕縛に当たる「目明かし」のことですが、幕府はこれを公認していないのに、あたかも正式な警吏の手足のように振る舞ったために、江戸の庶民達は大変困ったことが多かったようです。
ですから、彼らにも「真っ当でない」「岡」が付けられたのですね。

あ、そうそう、「岡惚れ」というのもありました。
昔から、四惚れとか五惚れとか言いますね、
「相惚れ」「片惚れ」「自惚れ」「岡惚れ」、それに「一目惚れ」。

この中で、騒動を起こすのが、「岡惚れ」
どうしてって？

「岡」が非公認だからです。

つまり、相手に配偶者や正式に言い交わした恋人がいるにもかかわらず、横（傍）から手を出す惚れ方なんですね。

これ、最近、また流行っているようで。「セカンド・バージン」ってのかな？
江戸の絵草紙なら、タイトルは「浮世の春　岡惚れ始末」……？？

2 の「岡」には、こういう何とも言えないヤミの妖しさが漂っていますが、1 の意味の「岡」さんにとってみれば、迷惑なことですねぇ。

2 にも「岡持ち」さんのように、ただ単に、傍らに提げて持ち運ぶ真面目な道具のような方達がいるんですけどねえ。

あ、岡（陸）釣りの得意なあなた！
その岡は、3 番目の岡ですけど、岡にいる魚は、本当はコワイですから、お気を付けください。
要らぬお世話？
スミマセン。

10.7　山の畑

今週初め、仕事で仙台に行ったのですが、その後、山形を回って帰りました。
私のかつての友人が山形に転居したものですから、久しぶりに会って食事がしたかったのです。

短い時間でしたが、楽しい一刻を過ごした後、慌ただしく新幹線に飛び乗ったのですが、お土産にいただいたのが「温海かぶ」、懐かしく、美味しくいただきました。写真

「温海かぶ」は、全国的に余り知られているわけではないのですが、熱烈な藤沢周平ファンにはよく知られていて、「海坂藩」の特産物。
なんといっても、「**三屋清左衛門残日録**」の中で、清左衛門が、花房町にある小料理屋「涌井」の女将みさの酌で飲む酒の席に出されている赤蕪の漬け物は、民田茄子の浅漬けとともに、最高なのです。
この赤蕪の漬け物が、「温海かぶ」なのですね。

今でもそうですが、温海かぶの本物は、山の傾斜地の畑で栽培されています。
なんと、今どきと思われるかも知れませんが、温海かぶの畑は「焼き畑」。
山の斜面の焼き畑で育てられるものは、なぜだかわからないけれど、絶品で、平地の畠で育てられるものとは明らかに違うのです。
不思議なことです。

ところで、この焼き畑、日本では、今でも、山形県の庄内のほかに、宮崎県の椎葉などでも行われています。
私たちは、焼き畑は、熱帯地方で行われている原始的耕作と教わってきましたが、昔は、我が国でも山の畑の多くは焼き畑でした。

農業で一番大変なのは、水やりを除くと、施肥と除草。
人が少なく、斜面地が多い山村では、この二つを減らすことのできる焼き畑は、大変広い範囲で行われていたのですが、明治に入って、森林化が進み、火入れの制限が厳しくなって、急速に衰退し、今はほとんど姿を消してしまいました。

数十年かけて育てられた森林の樹木を伐採すると、蓄積された腐食土に下草（雑草）が繁茂する。これを刈って焼き払った焼き畑では、焼いた１年目に、ソバを栽培するのが普通

でした。
2、3 年目は、豆、芋、稗粟。
4 年目になると、土地は急激に痩せてきますので、苗木を植えて、数十年かけて再び森林を育成・管理していくのですね。

そもそも、「畑」という言葉に「火」が付いているのは、この言葉が焼き畑を示しているからなのですが、平地の「はたけ」は「畑」ではなく、「畠」という字を使っていました。
こちらの「畠」は、「白＋田」で、水気がなく、白く乾燥した平地の「はたけ」を指していました。
最近、この区別をする方は絶滅寸前ですが、昔の歌では、ちゃんと区別されています。例えば、童謡赤蜻蛉では、作詞者三木露風は「山の畑の桑の実を小籠に摘んだは幻か」としています。

ちなみに、山の「畑」も里の「畠」も、日本でできた漢字です。
中国には、この言葉はありません。

そのせいでしょうか。
「耕して天に至る」という言葉は、孫文が日本の段々畑を見て言った言葉とされていますが、彼はここで致命的な誤りを犯しています。

日本の段々畑は、最も高いところから作られ、次第に山裾の方に下りていく形で作られてきました。
「耕して平地に至る」のです。
なぜか？
乏しい水を、高いところから細々と使っていかなければならないからですね。

豊かな都市の住人だった中国人孫文には、我が国の畑と畠の違いなどわからなかったのです。

最近の不勉強で軽薄なマスコミ人たちが、平気で「耕して天に至る」と言っているのを見ると、あと 10 年も経たないうちに、日本でも畑と畠を区別して使う者がいなくなるだろうと思い、悲しい気持ちになってしまいます。

10.18　「おと」と「ね」

先日お話しした「ウェストサイド・ストーリー」の中で歌われる曲で最も有名なのは、なんと言っても「トゥナイト」だと思いますが、これ以外にも、バーンスタインは、このミュージカルで数多くの名曲を書いています。

なかでも、トニーがマリアのことを思って歌う「*Maria*」は、私の好きな曲の一つです。

ところで、この曲でトニーは、
「マリア」という言葉を *The most beautiful sound I ever heard*（今まで聞いた中で最も美しい音)だと歌い、
「マリア」という言葉の響きは、
Say it loud and there's music playing,（大きな声で言えば、音楽が鳴っているように聞こえ)、
Say it soft and it's almost like praying.（小さな声でささやけば、祈りの言葉のように聞こえる）
と言っています。

これまで、この曲を普通に聴いていた私ですが、ある日ちょっとしたことが気になり始めました。

とこが？
それが少し説明しにくいのです。

上手く言えるかどうかわかりませんが、どうも、英語圏の方々と日本語を話す私どもとでは、音（sound）という言葉に関する語彙に含ませる内容にかなりの差があるのではないかということなのです。

具体的に申し上げますと、私達の言葉では、
「音（sound)」という字を、訓読みで、「おと」と呼ぶ場合のほかに、「ね」と呼ぶこともあります。

問題は、この区別で、同じ音（sound）でも、近く大きく聞こえるものを「おと」と呼び、「ね」と呼ぶ場合は、遠く小さく聞こえるものを指すのです。

例えば、鐘の音を「鐘のおと」という場合は近くで聞こえる音を、「鐘のね」という場合は遠くから聞こえる音を指しているように。
また、忍び音は、「しのびね」といい、小さく聞こえるか聞こえないほどの音量を示します。

これに対して、sound という言葉は、音量が大きい、小さいとは関係がなく、大きい音や小さい音の場合は修飾語を付けるか、別の言葉を用いるかするようです。

このようなことは、「灯」を「あかり」と言う場合と「ともしび」と言う場合にも見られるように、日本語ではしばしば見られることだと思います。

どちらが良いとか悪いとかの話ではありませんが、どうも、私達の言葉は、音とか、色とか、香りとか、味わいとか、胸の内の想いといった人間の感覚や、雨とか、雪とか、風とかの自然現象については、極めて繊細な状態を表せるようになっていて、実際そのような言葉遣いをしてきたのだと思います。

しかし、最近、言葉の世界でも、英語化が進み、従来のような「ことのは」を使い分けること自体が廃れつつあるようです。

「ことのは」は、人の気持ちを表す最終的な手段ですから、このことは、人とのコミュニケーションが大雑把になり、細かい感覚や気持ちが伝わらなくなってきていることを意味します。

これは、真剣に考えれば、大変重大なことかも知れないと私には思えます。

とすれば、やはり、世の中の流れには棹さすことになりますが、できる限り、繊細な言葉遣いを大切にしていくことが、日本語と私達日本人のこころを守るためには必要なのかなぁと思うのです。

ここまで書いてきて、やはり、これは、私のような素人ではなく、もっと専門の方が説明すべきことだと思いました。

最後に、再び音について。

音のない時空間を示す日本の言葉「静寂（しじま）」を、音のない沈黙を示す言葉「silence」で言い表すのは、やはり極めて難しいのではないかと思うのですが、うまく説明できない自分が残念です。

10.30　りんごと初恋

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

これは、島崎藤村の有名な「初恋」の冒頭部分ですが、これが雑誌「文学界」に発表されたのが明治 29 年の今日。

この詩の最初のフレーズ「まだあげ初めし前髪」という言葉は、髪をあげたばかりのうら若い美しい乙女の姿を通して、初恋にふさわしい初々しい印象を私達に与えます。
昔の女性にとって、髪をあげるというのは、子供から大人の女性になり、結婚できる年齢になったことを表す重要な儀式でした。下の写真は、髪あげした女性。

くらべこし　振分髪も　肩すぎぬ　君ならずして　誰かあぐべき　（第二十三段）

大変有名な『伊勢物語』のこの歌も、「幼なじみのあなたと結婚できる歳になりました、私はずっとあなたのことを思ってきたのです」という思いを「子供の髪である振り分け（かぶろ）髪から、髪をあげ、大人の女性になる」という行為に託して伝えたものであることはご承知の通りです。

島崎藤村の「初恋」のモデル「ゆふ」との淡い思いは、淡雪のようにはかなく消え、「ゆふ」は妻籠宿脇本陣奥谷に嫁ぐのですが、藤村は、その思いを、教師として赴任した仙台で、一編の詩に託して公表します。これが明治 29 年 10 月 30 日でした。

ところで、「初恋」には、林檎の木のほかに、林檎の実が出てきます。

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたえしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

この林檎は、現在「和りんご」と呼ばれているものです。
「和りんご」は、私達が目にしている今のリンゴとは違い、直径 5 センチ程度の小さな実で、6 月から 7 月にかけて熟し、直接食べるだけでなく、干して、粉にし、薬用に使っていました。

え、どうして「和りんご」だと言えるのかって？

それは、「林檎」という漢字からわかるのです。

「林檎」という字は、明治以前は、「和りんご」を指す言葉として使われていました。
ヨーロッパから入ってきた今の「洋りんご」には、「苹果（へいか)」という字が当てられていたのです。

宮沢賢治の「銀河鉄道の夜（大正 13 年)」を読まれた方は、ご承知かと思うのですが、賢治は、この「苹果」という言葉を「洋りんご」を指して使っています。(五、天気輪の柱　九、ジョバンニの切符)

昭和に入って、和りんごは衰退し、洋りんごの全盛時代が始まりますが、それまで和りんごを指していた「林檎」は、そのまま使われます。
このため、今では、私達は、「林檎」という言葉で、洋りんごを思い浮かべてしまいます。

しかし、藤村の初恋の林檎は、うら若き乙女の白く小さな手のひらに、そっと乗る小さな赤い実だったのです。

［参考］　銀河鉄道の夜から　（1924 年）
そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風にしていると考えますと、ジョバンニは、もう何とも云えずかなしくなって、また眼をそらに挙げました。
（五　天気輪の柱）

10.31　山のあなた

秋の日の　　/　ヰ゛オロンの　/　ためいきの
身にしみて　/　ひたぶるに　　/　うら悲し。

詩の好きな方であれば、一度は目にしたことがあるこの一節は、上田敏訳の「落葉」。
年老いた晩秋の一人きりの一日。

私は、この訳の美しさは、ヴェルレーヌの原詩を見て初めて感じられるのではないかと思っています。

え、フランス語は読めない？
まあ、ほんの１節だけ。（註をつけますから）

［　Chanson d'Automne　　（秋の歌(ｼｬﾝｿﾝ)）　］

Les sanglots longs　　（長いすすり泣き）
Des Violons　　（ヴァイオリンの）
De l'automne　　（秋の）
Blessent mon Coeur　　（傷つける　　私の心を）
D'une languer　　（けだるさで）
Monotone　　（単調な(ﾓﾉﾄｰﾝの)）

直訳すると､(秋のヴァイオリンの長いすすり泣きは､単調なけだるさで私の心を傷つける)
という感じでしょうか。
声に出して読むと
3 行目の終わり（l'automne）と 6 行目の終わり（Monotone）は、韻を踏んでいます。

冒頭にあげた上田敏のこの詩の訳を読むと、訳詩者は自分の心の中に、美しい言葉と心を持っていてはじめて、原詩の美しさを表すことができる、ということがはっきりわかるような気がします。

上田敏の「海潮音」の中には、このような美しい珠玉の世界が沢山見られますが、
次の「山のあなた」は、多くの方が若い頃口ずさんだはずです。

山のあなたの　空遠く
「幸」住むと　人のいふ
噫、われひとと　尋(と)めゆきて
涙さしぐみ　かへりきぬ。
山のあなたに　なほ遠く
「幸」住むと　人のいふ。

これも原詩をここに出したいのですが、この訳も上田敏の面目躍如です。
例えば、2 行目と 6 行目の「人」と 3 行目の「ひと」を使い分けているのですが、
原詩は、「人」のところが、「Sagen die Leute」（多くの人々が言っている）となっているのに対して、
「ひと」のところは、「ich ging im Schwarme der andern」（他の人たちと一緒に尋ねて行った）となっているのです。
ピープルと他人の違いを使い分けているのです。

さらに、5 行目「山のあなたに　なほ遠く」は、「Ueber den Bergen, weit weit drueben」です。なほ遠くは、「山を越え、遠く、遠くの向こうに」なんですね。

ところで、「海潮音」には、この有名な「山のあなた」の他に、「海のあなたの」という詩も載っています。

海のあなたの遥けき国へ
いつも夢路の波枕、
波の枕のなくなくぞ、
こがれ憧れわたるかな、
海のあなたの遥けき国へ。

こちらは、カール･ブッセではなく、テオドル・オオバネルの作詩。

ところで、10 月 14 日のお話「鉄道の日」で、鉄道唱歌第 3 節

♪　窓より近く品川の　台場も見えて波白き
　　海のあなたにうすがすむ　山は上総か房州か

この「海のあなたにうすがすむ」の部分を、「うす」が住んでいるのかと不思議に思ったのは、この「海潮音」の二つの訳詩に余りにも心奪われていたせいなのです。

昨日 10 月 30 日は、上田敏の生まれた日です。

12.14　キセルと鬼平

刻み煙草の売れ行きアップで、微かに希望の光が差してきたような気がしないわけでもありませんが（暮らし「タバコの値上げとキセル」参照。）、キセルにちなんだ言葉が絶滅寸前であることには違いありません。

差しあたり、まだなんとか生きのびている言葉に「やにさがる」がありますが、この言葉も、私のところの学生諸君は誰も知りませんでしたね。

これをお読みの方はそんなことはないと思いますが、念のため説明をしておきますと、私たち男どもは、ちょっと美しい女性を見ると、鼻の下を伸ばして「やに下がる」、つまり締まりがなくなりニヤニヤすることですが、この「やに下がる」は、キセルからきた言葉のようです。

ものの本によりますと、
お金持ちの中には、キセルの真ん中部分に竹を使わずに、雁首から吸い口まですべて延べ銀製の豪華なものを作る者がいて、その延べ銀製のキセルが目立つように、「雁首を上にして咥える」輩がいたそうです。

そういう輩のなかには、大店の若旦那が多かったことから、そのような目立ちたがりの、親のスネかじりの、得意になってニヤニヤ、へらへらする若い男性を指して「やに下がり」と言ったようです。

どうして「やに下がり」？
それは、雁首を上に上げるのだから、ヤニは下の方に下がってきますよねぇ。

ところで、鬼平こと、火附盗賊改方、長谷川平蔵クンは、無類のタバコ好きで、映画の中でもなにかというと、キセルでタバコを呑んでいますので、ご覧になった方もおられると思います。

この場面、よく見ないとわかりにくいのですが、平蔵さん、なんと、時折、総延べ銀のキセルでタバコを呑んでいるんですよ。

平蔵さんも、若い頃は、放蕩無頼の生活を送っていましたから、やに下がっていたのですかね、と思っていたのですが。

実は、このキセル、平蔵の父の形見で、平蔵さんの父が京都町奉行時代、15 両もかけて誂えさせたと鬼平犯科帳には書かれていました。
平蔵さんは無実でした。スミマセン。
下の写真は、鬼平犯科帳の「見張りの糸」の一シーン。

次に、絶滅危惧状態にある言葉として、「キセル乗車」。
最近の若い方々にはキセル乗車といってもわからない人の方が多いのですね。
キセルそのものを知らないのですから、仕方ないのですが、キセルの絵を描いて、雁首部分と吸い口部分はカネなんだけど（つまり入り口と出口はカネを払うけど）、真ん中部分はカネでなく、中抜き（カネを払わない）で煙のように通るだけ、と説明するのですが、なかなか理解できないみたいです。

さて、このキセル乗車、かつては、刑法学者の間で、詐欺罪に当たるかどうかが議論になったことがあります。
キセル乗車は、
①　不正な乗車をする気持ちで
②　改札係(人)をだまして
③　改札を通過し
④　利益を得る
ということですから、刑法第 246 条第 2 項の利益詐欺罪の四つの要件をすべて満たすことになるというのを昔、計法の講義で聴いて、ヤバイと思ったことがあるのですが、これも今は昔。
今は、「スイカ(suica)」なるものが登場して、キセルそのものが難しくなりました。

もう、少し経つと、「キセル乗車」は、古語辞典入りするかも知れません。

12.16　無賃乗車と薩摩の守

「キセル乗車」は、天敵スイカによって、絶滅寸前であることは先日申し上げましたが、「無賃乗車」の方はまだまだ健在。

最近では、鉄道会社の関係者による不正乗車のことが報道されていましたね。
このケース、某鉄道会社社員が、業務用パスを改ざんして長期間にわたって他の会社の路線にも無賃乗車をしていたというもので、これはさすがに悪質、逮捕されましたね。
これは、刑法に新設された第 246 条の 2 の「電磁詐欺」に当たると思うのですが、どうも、結局はこの罪では訴追されなかったようです。ナンデモ、某鉄道会社が告発しなかったらしいのですが、そんなことでいいんですかね。

こういう悪質なものから、そうでないものまで、無賃乗車には、いろいろな形があります。
例えば、乗るべき列車を間違えた、居眠りして目的地を過ぎてしまった、などの場合は、無賃乗車だけれど、普通は、運賃を請求しないで引き返しを認める取り扱い（**無賃送還**）が認められています。

ところで、私達は、学生の頃、無賃乗車のことを「薩摩の守」って言っていました。

これ、誰でもよく知っていることと思っていたのですが、どうも最近ではそうでもないようです。
またまた、私のところの学生の話になりますが、これまた残念なことに、薩摩の守？　なんのことですかあ。が反応。

まあ、これをお読みの方は、そんなことはないと思いますが、念のため、簡単に説明をしておきます。
これ、平家物語の巻七「忠度都落ち」からきているのですね。

「忠度都落ち」の「忠度」とは、ご存じ、「平忠度」のこと。
平忠度は、平忠盛の六男、清盛の腹違いの末弟です。
平氏の中でも傑出した和歌の上手で、数少ない智勇に優れた武将の一人でした。
平家が都を追われたときは 40 歳。彼は「薩摩の守」でした。

このことから、「平忠度」→「忠度」→「ただのり」→「無賃乗車」→「薩摩の守」という訳ですね。

この「ただのり」という意味での「薩摩の守」は、列車が走り始めた時代よりもずっと前から使われていたようです。

狂言の「薩摩の守」では、住吉の天王寺参詣をしようとしている一文無しの東国の新発意（しんぼち…修行僧）が、神崎川の渡しをただで渡る方法を教わったのですが、教えられ

たとおり、船頭から「船賃は」と問われたら「船賃は薩摩の守」といい、その心はと問われたら、「忠度（ただのり）」と答えるべきところ、「忠度」を忘れて「青海苔の引き干し」と答えてしまい、船頭から「やくたいもなし、とっととおりやれ」と叱られるところがあります。

まあ、薩摩の守平忠度は、気の毒に、こんな昔から無賃乗車の隠語に使われていたのですが、しかし、平家物語の中の「忠度都落ち」に出てくる「平忠度」の姿は、私たちの涙を誘うほど、気高く気品に溢れています。

一度、この姿を知ってしまうと、誰もがこの平家の公達を愛してしまうのでしょうか。
「ただのり」の隠語が、薩摩の守の平忠度が庶民の間にも好かれたせいだと思うと、それはそれでいいかと思ってしまいます。

12.19　う・さぎ

いよいよ、今年も後２週間を切りました。
今日やっと、年賀状に着手しました。

今年の干支、「寅」は、「猛虎」からはほど遠く、フーテンの寅さんのような、気は良いけれど口だけの首相が二人も続いて､なんとも期待はずれの年になってしまったみたいです。

さて、来年は、うさぎ年。
「うさぎの上り坂」という諺がありますが、この諺のように、物事がとんとん拍子にうまくいくことを期待したいと思います。

ところで､「うさぎの上り坂」という諺は､うさぎは前足に比べて後ろ足が非常に長いため、上り坂を非常に早く駆け上がることが出来ることからついたものです。

でも、この諺には、弱点があって、うさぎさんは、下り坂にめっぽう弱い。
ですからね、猟師さん、うさぎ狩りをするときは、峯の上から下に向かって降りながら狩るのですね。

さて、来年は、上り坂であれば、良いのですが。

えっ、下り坂かも？って
それは、困りますねぇ。

「うさぎ」という言葉の由来には、いろいろな説があるようですが、有力なものは、元々うさぎが「う」と呼ばれていたのに、サンスクリット語のうさぎを意味する「ささぎ」（或いは朝鮮語のうさぎを意味する「ヲサガム」）がくっついて出来たというもののようです。
うーん、これだと「うさぎ・ウサギ」さんですね。
まあ、私たちにはどうでもいいことですがね。

ところで、うさぎの数え方って、１匹、２匹じゃあなくて、１羽、２羽だって知っていました？
ときどきクイズにでますから、知っている人も多いですよね。

でも、どうして？

これ、ウソかホントか怪しいけれど、昔、庶民が四つ足を食べることが禁じられていた時代、これは、「う」と「さぎ」の肉、つまり「鵜」と「鷺」の肉だと言い訳したのですね。
で、決して四つ足ではないことを示すために、ちゃんと一羽二羽と数えて、お役人を騙したケシカラン輩たちがいたのですよ。
もとい、騙されたふりをして、う・さぎを接待されたお役人がいたんですね。

まあ、豚のレバーやタンを「焼き鳥」といい、イノシシの肉を山の鯨にし、鶏肉なのに雉焼き丼と称するような民族ですから、これくらい仕方ないですかね。

日本で肉食が禁じられたのは、天武天皇の世の 675 年。
随分古くからなのです。

実は、当初、対象はお坊さんだけだったのだけど、いつの間にか全国民も守れということになったらしいのです。
お坊さんたちだって人間ですから、自分たちだけ食べられないってケシカランと思ったのでしょうね。

ところで、イギリスなどでは、ウサギ料理と言えば、シチューやソテーにしたのを見かけますが、日本ではどんな形で食べていたのですかね。

私、東北仙台に 10 年ほど住んでいたことがあるのですが、東北でウサギ料理と言えば、秋田や山形の「ウサギ汁」。今でも、結構食べさせるところがあります。

私も、一度味わっておかなきゃ、と食べたことがあるのですが、臭くはなかったですね。
現物は、こんな感じです。

私の好きな鬼平犯科帳では、うさぎと言えば、木村忠吾クン。
どうして「うさぎ」？

これ、色白ぽっちゃり顔が、芝の饅頭屋のうさぎ饅頭に顔が似ているという理由で、付けられたあだ名が「兔忠（うさちゅう）」。
ちょっと性格が優しいというのもあるんでしょうね。尾美としのりさん、ぴったりですねぇ。